

過去に幾度ももの津波被害を受けながらも 復興を遂げた地域だからこそ学べることもある

現在、1年生の学校設定科目「サイエンス・アクセス」では、主にエネルギー、都市、防災、医療、環境、流通・経済、情報、福祉の8つのテーマを中心とした探求学習を実施しています。そして、現在社会が抱える科学的諸問題を明らかにし、その解決に向けて適切に判断、表現、行動する能力の育成を目指しております。

サイエンス・アクセスの一環として12月5日(土)に宮古市田老地区において、沿岸震災復興現地研修会を1年生23名が参加して実施しました。宮古市田老地区は明治29年と昭和8年の津波で壊滅的な被害を受け、「万里の長城」と称された巨大な防潮堤を整備した防災意識が非常に高い地域です。しかし、平成23年の津波により防潮堤をこえた津波が町を襲い、181名の死者・行方不明者の被害があり、現在もその捜索が続いています。今回の現地研修会では、破壊された防潮堤や津波浸水地域のフィールドワークを実施しました。そして、現在田老地区の復興や町作りの先頭に立って活躍している担当者からの講演を聞き、今後のサイエンス・アクセスの学習を深めることを目的として行いました。

最初の研修は、震災時の状況やその映像を通じて自然災害の恐ろしさの伝承活動をしている「学ぶ防災」です。ガイドの澤口強さんは当時トラックの運転手をしていました。第一防潮堤の上で震災当時の様子を話しを聞きました。「防潮堤があったおかげで、現在のここにいることができる。震災後、防潮堤に意味があったのかということがいわれたが、少なくとも防潮堤がなかったら私は津波の犠牲になっていたかもしれない。一番古い防潮堤は昭和8年の津波被害のあと建設が始まった。そもそも、防潮堤の役割は津波が町にくるのを防ぐものではなく、津波が町を襲うまでの時間を稼ぐものである。そして、その間に住民たちは高台に避難する役目であった。その後、高潮から町を守る第2防潮堤、第3防潮堤が建設され、長い時間が経過する中で、総延長2433mの防潮堤が町を守ってくれはずだという誤解を招いてしまった。」と津波当時の様子を語りながら説明してくれました。その後、来年3月に震災の資料館となる田老観光ホテルを見学し、田老観光ホテルの6階から撮影された津波被害の様子を納めた貴重な映像を見ました。ガイドの澤口さんは当時のことを振り返りながら、時には涙ながらに津波の恐ろしさを教えてくれました。そして、最後に「震災について難しいことが言われているが、まずは先人の言葉を真摯に受け止め行動することが大切だ。」と、昭和9年3月の「大海嘯記念」を紹介してもらいました。

つづいて、田老総合事務所で現在まちづくり計画の中心となって活躍している宮古市田老総合事務所 地域振興担当の齊藤清志主査より震災復興講義「田老地区の状況について」を受けました。齊藤さんは当時個人が撮影した写真を交えて、田老地区の震災直後の町の様子や自分の自宅があった場所、そして避難生活の様子を語ってもらいました。震災によって大きく変わったことは田老地区の住民が4434人(H23.3.1)から3188人(H27.8.1)に1246人減ったこと。特に減少したのは40代で震災前の59.7%になり、そのことで0才から9才と70代の人口が3世代にわたって減少したこと。人口が減ったことにより10の自治会が解散し、地域のイベントが廃れていくなどコミュニティー存続の問題が大きいこと。そして現在整備している「田老地区の復興まちづくり計画」について説明してもらいました。生徒から出された多くの質問にも答えてもらい、「田老の津波災害を周囲に伝えること。どこに住んでいても災害には必ず合う。そのときに慌てること無く自分が生き延びる方法を考え、その方法を家族で話し合うことこそ私たちが復興に対してできることだ。」と教えてもらいました。

研修会を行った田老までは往復約8時間の長距離移動でした。沿岸に行かずわかつたつもりでいても、現地に行って初めて感じる現状、目の当たりにして初めて理解できる現実がありました。そして何より、私たちが今後生活する上で大切なことを学ぶ意義深い研修会となりました。



防潮堤から津波の様子を語る「学ぶ防災」の澤口さん(右)

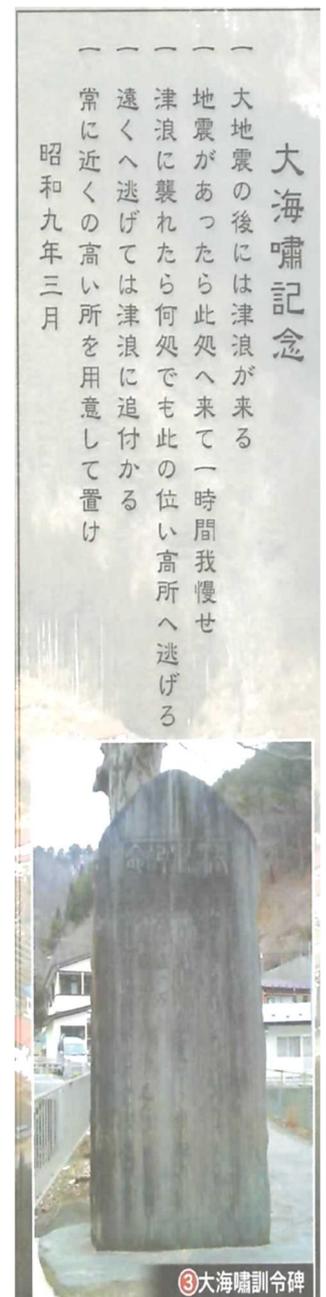


講義をした齊藤さん(左)に謝辞を述べる代表の生徒

参加者の感想

- 実際に現地に行って、津波を体験した人の話を聞くことができ、とても良い機会になった。津波の映像を見て、テレビなどで何度も見たことがあったが、改めて津波の怖さを知ることができた。そしてSAでは防災について調べているのでとても参考になった。今私たちができることは、震災のことを忘れず、学んだことをこれから伝えていくことだと思う。また、このような機会があれば参加して、たくさん学んでいきたい。
- 家族で田老を何回か訪れたことがあったが、今回の研修ではより深く見つめ直すことができた。今回の震災によって、今まで行ってきたものよりも確かな防災を追求していることがわかった。高台移転のイメージがなかなか湧かなかったが、田老地区の現在を見渡して、まちづくりをしていくことはとても大きな作業だと知った。また、資金確保や土地の買収の大変さによって、なかなか復興活動が進められない現実があることもわかった。
- 私は初めて被災地に行って、復興途中の町の風景を見ました。一番勘違いしていたことは防潮堤の役割が、波を食い止めるのではなく、波の威力を分散、減少そして避難の時間を稼ぎだだったということです。この役割をもっと多くの人々が認識していれば、もっと助かったかもしれません。そして一番怖かったのは、いつもと変わらない風景から、津波がくることです。初めて自分の目で見て感じたことが多くあります！今回は研修に参加して、本当に良かったと思います。
- 今回の研修を通して、田老の被害と復興の現状を知ることができた。そして2つの勘違いを正すことができた。1つは防潮堤は、あくまで時間稼ぎであり、避難が前提であること。2つ目は防災無線は聞こえないことがあるため、防潮堤が海への視界を遮って津波が見えないということとは関係なく、地震がきたらすぐ逃げるべきということだ。やはり実際に自分の目で見て、耳で聞かないと分からないことは多いと感じた。私たちにできることは何か、これからよく考え、行動に移していきたい。
- 内陸にいと沿岸の状況を目で実際に見る機会が少ないので、今回の研修に参加して良かった。実際に町を目で見て、話を聞いて、勉強になった。将来工学計の学部に進もうと考えている私にとって、特に防潮堤の話に興味を持った。さらに、防潮堤は波を防ぐためのものではなく、時間を稼ぎ波の威力を弱めるために使われることを初めて知った。周囲の人たちに今回のことを伝え、正しい知識を広めようと思った。

1)「学ぶ防災」(宮古市観光協会)パンフレットより引用



大海嘯記念¹⁾